

# 万葉集における正訓文字の訓法

—吾・我について—

鶴

久

周知の如く、万葉集では「思・念」「言・云」「有・在」……などがオモフ・モフ、トイフ・トフ・チフ、ニアリ・ナリなど意味上の差異はなくて、二様・三様に訓まるべく用ゐられてゐる。「吾・我」も例外でなく、アレ・ワレ・アガ・ワガなどを表現すべく用ゐられてゐる。しかしながら、逆に、表記された吾・我を如何なる場合にアレ・アガ・ワレ・ワガと訓みわけけるかは極めて困難である。同一歌中においてさへも

かもがと和賀美斯古良かもがと阿賀美斯古邇 (応神記)

のやうに同一意味においてアガ・ワガと両用されてゐるほどであり断念せざるを得ない感じがしないでもない。したがって、従来もこの点に考察の目は向けられたものの或程度であきらめられてゐる状態である。しかるに、思・念については、オモフ・モフと両用されるとしても、オモフと訓むべきか、モフと訓むべきか、集中の確例や他の上代文献の事例からかなり明らかにすることができた(福田良輔教授・退官記念論文集所載の拙稿参照)。それ故、吾・我においても集中の確例をはじめ他の上代文献の事例を傍証例としてある程

度の訓みわけは可能であるやうに思はれる。例へば「吾乎召良米夜十六・三八八六」が傍訓の通りワと訓むべきことは同歌に全く同じ用法をした「和平召良米夜」が三例も共存してゐることから判断される。また、

(a) あひ見ては千歳やいぬる否をかも我哉然念君まちがてに (一・二五三九)

(b) い杭には鏡をかけま杭にはま玉をかけま玉なす我念妹毛鏡なす我念妹毛 (十三・三二六三)

の傍線部は同歌が別に存在することによって、即ち(a)は万葉集巻十の

あひ見ては千歳やいぬる否をかも安礼也思加毛布君まちがてに (三四七〇)

(b)は允恭記の

い杭には鏡をかけま杭にはま玉をかけま玉なす阿賀母布伊毛鏡なす阿賀母布都麻

によつて、それぞれ(a)アレヤシカモフ・(b)アガモフイモと訓むこと明白である。つまり、念をモフと訓むことも我をアレ・ア

ガと訓むことも截然としてゐるのである。かかる事例は何も右の二例にとどまらず「吾念妹」「吾思君」「我思妻」などは、アガモフイモ（キミ・ツマ）であつて、この場合、念・思はモフ、吾・我はアガと訓むべきこと、前掲の拙稿において述べたところである。ただ「うるはしと和加毛布伎美波（東大寺要録・二）の如きは例外的にワガモフとなつてゐるが、これは院政期の編であり、当時としてはアガモフよりもワガモフが一般的であつたための記載である可能性が強く、この例を万葉集や記・紀などに適用することはできないであらう。かやうに、吾・我も場合によつてはかなり明確に施訓できるのであるから、如何なる場合にアレ・ワレ・ワガ・アガ・ワガと訓みわけるか、考察の目を向けることも、あなたがち無意味ではないと思はれる。しかるに、従来はワレ・アレ・ワガ・アガと漠然と感によつて、あるいは恣意的に施訓されてきたのであらうか、諸注釈書によつてまちまちであり、必ずしも統一されてはゐない。とは言へ、アレ・ワレ・アガ・ワガをどういふ風に施訓するかは、それぞれに確例があつて、意味上の差異がない場合は、厳密になればなるほど思・念の場合と同様困難であり、吾・我に対する諸注釈書の施訓がまちまちであるのも故なしとしない。だからと言つて、断念するのは速断に過ぎるかと思ふ。明確に施訓できる場合もあるからして、明らかにできるところまでは考察を行なふべきであり、可能性の程度にせよ、決定される例は決定し、不明なものは不明とするなど、一度は誰かがなすべきことであらう。

万葉集を多少でもひもといた人は気付かれるであらうが、吾背子（二六八以下四十七例）・吾背兒（一四三二以下四例）・我背子（二五二五以下四例）・吾兄子（二九四二以下三例）・吾勢子（一一一以

下三例）・吾瀬子（一八二二・一九〇三）・我背子（一五三五・一六七四・二四六五）・吾世古（二二七六・三三一五・四二五九）・吾世子（二〇一五）・我勢子（二三八四）・我兄子（二九三八）・吾勢枯（一〇五）・妾背兒（三二八〇）・吾勢故（四二〇四）はアガセコでなくワガセコと訓まれて諸注釈書にも異訓はない。一字一音の仮名書の例も和我世古（三九四〇・四五〇四）和阿世古（八一二）・和我西古（三四四五）・和我勢兒（三八九〇）・和何勢故（三九七五・四〇〇八）・和我世故（四一七九）・和餓勢故（紀・十三）・和賀世古（東遊歌・二例）の如く、すべてワガセコであり、アガセコの例が皆無であるのと相俟つて、文献時代においてはセコに接する吾・我・妾をワガと訓むべきことは判然としている。同様に、吾勢（三八）・吾弟（一三〇）・吾背（六七九以下六例）・我背（一二九二）・我兄（二九三六）もアガセの確例がないのと相俟つて、和我勢（四四四三）・和賀勢（三九七三）・和我世（三三九九以上五例）・和餓齋（紀・十一）・和阿世（琴歌譜・庭立振）、和賀西奈（三四六九・三四八三）・和我世奈（四四二二・四四二六・四四二八）・和加世奈（承德本古謡集・陸奥風俗）からしてワガセと訓むべきこと明白である。吾勢能君（五九）・吾背乃君（二八六）・吾背乃公（一〇二〇）も和我世乃伎美（四〇〇六）・和賀勢能伎美（四〇一〇）・和加世乃支兒（神楽歌・我妹子）の如き用例から、少なくとも万葉集ではワガセノキミと訓んで差支へなからう。仁徳記に一例「阿賀勢能岐美波」の事例が存在するのは、古くアガセノキミ・アガセコ・アガセと言つてゐたことを暗示してゐるが、仁徳記のアガセノキミは化石的に残存してゐる例と見なされ、「吾屋惶根尊（神代紀上）八阿夜詞志古泥神（神代紀）」の如き借

訓假名の例とともに、ア・アガは古形ではないかと推察される可能性を暗示してゐると言へる。

「我・妹(子)」の場合も和伎母児(三五一九)・和伎毛古(三五六六)・和伎母故(三五八五・三五九六・三六六六・四一〇四)・和伎毛故(三六一六他十例)・和芸毛故(三七一〇・四二二二)・和芸毛古(四三五七・四四〇四)・和伎母古(四三・五三)・和伎米故(四三四五)・和芸毛古(紀・十一)・和岐毛古(神楽歌・葛)・和支毛古(神楽歌・我妹子・磯良崎)のやうにワギモコに限られ、アガイモコ、アギモの例がないことは、吾妹子(四四以下四十一例)・吾妹児(一二〇以下三十七例)・吾妹(七四五以下五十一例)・我妹児(一七七五)・我妹(二四一〇・二四二二・二四六二・二四九九)・我妹子(二六〇九・二八九五・三三三七)等の事例もワギモコと施訓さるべきことを明確にしてゐる。そして、ワギモの例は和伎母(三四五三・三七六四)・倭蟻慕(紀・十七)・和支母(常陸風土記)と数は少ないが、ワギモコの事例を看察して、我妹(一七四二・二六八三・三二一九)・吾妹(四七一以下二十二例)はワギモと訓んで間違ひなからう。ワギモ(コ)はワガイモ(コ)が一語化して二重母音を形成したため、それを忌避して、上接語の尾母音が脱落したものである。したがって、原形のワガイモ(コ)が当然考へられるのであるが、当時、すでに、少なくとも歌語ではワギモが普通であつたと見なされる。ただ、一例

わがいもこ  
和我伊母古が偲ひにせよとつけし紐糸になるともわは解かじと

よ(二十・四四〇五)

の如く、未融合形のワガイモコが防人歌に見られ、色々と考慮推察されるところであるが、この防人歌の一例によって「我妹子」「我

妹」等をワガイモコ・ワガイモと訓まねばならないことはない。勿論、ワギモコの原形であるワガイモコが未融合形のまま防人歌に残存してゐるといふのは興味ある事実を提供してはゐるが、当時、中央語・東国語ともにワギモ(コ)が歌語であつたのである。

吾家(六六三・一一四六・一三五八・一四八八・一七六七・二二二八・二四〇一・三九七八・四〇六五)・吾宅(九四二・一四四一・一四四五・一七六七)はワギモ(コ)の場合と違って、和企弊(八四一)・和伎霸(八五九)・和芸弊(四〇四八)・和芸幣(紀・七・十)・和岐幣(景行記)・和芸幣(仁徳記)のほかに、和我霸(八一六)・和何弊(八三七)が存在するから、ワギへともワガへとも訓む可能性がある。いづれにしても、吾をアガでなくワガと訓むべきことだけは明瞭である。結論から先に述べると、吾家・吾宅はワギへと訓むべきであり、当時ワギへが普通であつたと見なされ、ワギへはワガイへが融合して二重母音を形成したため、それを忌避した結果、上接語の尾母音が脱落してできた語形である。それに対し、ワガへやワガモは二重母音忌避のため母音が脱落したのではなく、ワガと家・妹の古形へ・モが直接結合して複合化したもので、いはば古形の名残であり、当時すでに古語となつてゐたのである。(万葉集六十六号所収拙稿参照)

## 二

前記したやうに、次にくる語によって我・吾がワガであつたり、アガであつたり、ほぼ決つてゐることがあるとすれば、結合した語や慣用句・表現形式等によって、我・吾の訓を決定することも一つの方法であらう。

第一に「吾念妹」「吾念君」「吾念人」などにおいては、吾はアガと施訓すべく、アガモフイモ（キミ・ヒト）であつたことを想起していただきたい。かかる事例は何も「アガモフ」に限らず他にも存在する。

浜のまなごも吾恋にあにまさらじか（四・五九六）

吾恋は千引の石を七ばかり首にかけむも（四・七四三）

吾恋は吉野の河の霧に立ちつつ（六・九一六）

春草の繁き吾恋（九・一九二〇）

吾恋を妻は知れるを（十・一九九八）

吾恋はなぐさめかねつ（十一・二八一四）

吾恋は夜昼わかず（十二・二九〇二）

思へかも心のいたき妾恋ぞ日にけに益る（十三・三三二九）

吾恋はしぐれし降らば沾れつつも行かむ（十・二二三六）

鳴きて行く雁は言恋妹に告げこそ（十・二二二九）

の傍線部は従来ワガコヒ・アガコヒと訓まれ統一されてはゐない。

注釈書によつては、ワガと訓んだりアガと訓んだりしてゐるものもある。仮名書の事例を見ると、

安我古非はまさかもかなし（十四・三四〇二）

安我古非のみし時なかりけり（十四・三四二六）

阿我古比をしろしてつけて妹にしらせむ（二十・四三六六）

の如く、すべてアガコヒである。三例とも東歌・防人歌の例である点、懸念がなくもないが、三首とも方言色は薄く、東歌・防人歌に中央語の古形を残存してゐることもあり、右の三例によつて「吾恋」「妾恋」をアガヒコと訓むこともあながち不穩当とは言はれない。加へて、以下に述べるやうに、吾・我に恋が接する場合、奇妙

にアレ・アガであることを考慮すると、アガコヒの施訓は當を得てゐるものと思はれる。

吾恋目八方（一・二二一、九・一八〇五、十一・二五三〇）

吾将恋八方（四・六八一、十・二二六五、二三〇〇、十一・二七七三、二八〇五）

吾将恋也毛（七・一三二八）

吾恋目八面（十・二二五五）

吾恋八方（十一・二五九八）

余将恋八方（十一・二七九七）

も、諸注にワレコヒメヤモ・アレコヒメヤモの両訓が見られるが、

仮名書の例に

安礼古非米夜母（十四・三五〇八、十七・三九七〇）

和礼故飛米夜母（五・八五八）

の如き両形があり、いづれとも断定できない。しかし、吾・我と恋との関連において、両者が接する場合、アレ・アガであることを看案すれば、一応アレコヒメヤモと訓んでおくのが無難のやうである。

吾爾恋目八（四・七七二）

もワレニコヒメヤ・アレニコヒメヤの両訓が可能であるが、アレニコヒメヤが穩当であらう。されば、ワガコヒヤマメ・アガコヒヤマ

メと両訓が見える

吾恋止眼（四・六七八）

吾恋山口（十二・二八八三）

吾恋正目（十二・二八八三、二九七九、三〇〇四）

吾恋八鬼目（十三・三二五〇）

も「安我胡非夜麻米(三六〇五)」からして、アガコヒヤマメの訓によるのが良く、

我恋将息(二・八八、十二・二九五八)

吾恋将止(十二・二七三八)

も、アガコヒヤマメと訓んで当を得てゐるであらう。

吾恋居牟(十・二〇三七)

吾恋将居(十・二〇三八、二二九六、二六七三)

吾恋居(十一・二三六七、二七一五)

言恋将居(十一・二五三四)

我恋将居(十二・二九三五)

も、吾・我・言に対してワガ・アガの両訓があるが、

安我孤悲乎良牟(三九三六)

によつてアガコヒヨラムと訓むべきであらう。勿論、「安礼古非乎良牟(三七四二)」の例もあるやうに、アレコヒヨラムと訓む可能性もありはするが、一首の意からしてアガコヒヨラムと施訓して差支へなからう。同様にして、

吾恋益(八・一四一九)

も「安我古非麻左流(三七八一)」によりアガコヒマサルと訓んで

差支へなく、

吾者将恋名(四・五五〇、七、一一七九、十二・三一九〇)

吾波孤悲牟奈(九・一七七八)

吾波将恋奈(十二・三一八八)

吾者将恋奈(九・一七八五)

余者将恋名(十一・二六七四)

も「安礼波古非牟奈(三四七七)」からして、アレハコヒムナと訓

むのが良からう。

吾恋卷者(四・五五一)

吾恋死者(十二・三一〇五)

も「安我古非万久波(三六八三)」。「安我古非思奈婆(三五六六)」の事例から、それぞれアガコヒマクハ・アガコヒシナバと訓んで誤りあるまい。

朕恋爾家里(三・二三六)

吾恋(十一・二四二六)

吾恋二来(十二・三〇九三)

も「安礼故非爾家里(四一二一)」の傍証例によりアレコヒニケリと施訓して良いと思ふ。ところで、

いつの間にも吾恋爾来(四・五二三、十三・三二六四)

の傍線部は諸注釈書アガコヒニケル・ワガコヒニケルと訓んでいるが、ニケリが格助詞ガをとることはなく、意味的にもワガ・アガでは適切を欠くやうである。前記のアレコヒニケリもさることながら

吾醉爾家里(六・九八九)

和礼惠比邇祁理(応神記)

の傍証例もあるやうに、アレコヒニケルと施訓すべきであらう。エヒニケリの場合であるからワレであつて、当面の場合は恋フとの関係からアレと訓むのである。

吾恋者(四・五二六、十一・二四四三、十二・三〇八七、十三

・三二四四)

我恋染者(十一・二七二五)

吾恋良久波(四・七六〇、十三・三二六〇)

吾恋久波(十一・二七三九)

吾恋苦波（八・一匹匹九）

吾恋良苦者（十二・三〇八八、十二・三一九六）

吾恋良久者（十・一九〇三、十一・二七九六、十六・三八四八）

吾恋鏝（十二・三二六八）

吾恋落波（十二・二六一二）

吾恋樂者（十一・二七〇九）

の吾・我もワガ・アガの両訓があるが、「安我古布良久波（三五六〇）」によつてアガコフラクハと訓むのが当を得てゐると思はれる。

吾恋度（四・五八八、六五八、六七二、十・二二八五、十一・二四八六）

の吾にもワガ・アガの両訓があるが、「安我故非和多流（三六三三）」を看察して、アガコヒワタルと施訓して良いと思ふ。ただし塙書房万葉集のやうに、五八八・六五八・六七二・二二八五番ではアガコヒワタルと訓み、二四八六番だけアレコヒワタルと訓みわたしたのは一首の意味内容に差異があつてこそ考へられることであるが、それが見られないのにどうしてアレと訓んだのかわからない。かやうに考察してくれば、仮名書の確例を欠いてゐるため、アガ・ワガ、アレ・ワレの両訓があつて明確に断定できない次の諸例も、傍訓の通り施訓して、さして間違ひはないであらう。

吾恋不止（十・一九一〇、十一・二四六九）

我恋不止（十一・二六三二）

我恋流（一・三五、十一・二七八五）

吾恋流（二・二一〇、四・四八五、五〇九、十三・三二七二）

吾等恋（十・二〇〇三）

吾恋之（六・九六三）

我恋（十・二二三四）

吾者衣恋流（六・九三五）

吾波曾恋流（十二・三〇四一）

吾齒衣恋（十二・二九三三）

吾者曾恋（十三・三二九三）

吾波也將恋（九・一七七二）

吾者哉將恋（九・一七七二）

余恋始（四・六四二）

余可恋奴（十・一九九九）

余恋居久（十一・二六四九）

吾恋居者（四・四八八、九・一六八一、十一・二四六五）

吾者恋南（十一・二五四八）

我可將恋奈（十三・三二九一）

吾恋之（八・一五一八、十・二〇四八）

吾不恋有牟（二・一四〇）

吾不恋將有（十一・二六〇六）

吾孤悲射良牟（十六・三八九二）

吾恋行者（七・一一一〇）

吾將恋香聞（七・一一八一）

吾者恋香（七・一三三一、十二・二八九九）

吾如此恋常（八・一四九八）

吾恋われこころを 矣や (十二・二八四九)

既述の諸点からすれば

吾之片恋はやむ時もなし (十一・二八一五)

の傍線部はアガカタコヒと訓むべきであらう。

夢に見ゆ安我加多孤悲の繁ければかも (十七・三九二九)

は傍証の役をはたしてゐると思ふ。

かくだにも吾者祈奈君にあはじかも (三・三七九)

かくだにも吾波乞誓君にあはじかも (三・三八〇)

は諸注ワレハコヒナムと訓んでゐる。しかるに、ワレと訓んだ塙書

房万葉集が

我例乞能米登 (五・九〇四)

吾波許比能武 (五・九〇六)

ではアレハコヒノムと訓んでいる。吾が祈と接した場合、アレ・ワ

レ何れであるか、あるいは両者を認めるべきか、三七九・三八〇の

大伴坂上郎女の歌と九〇四・九六〇の憶良の歌でワレ・アレと訓み

わけられてゐるのは、何らかの理由があつてのことと思はれる。

ぬさまつり安我許比能麻久 (十七・四〇〇八)

天地の神則會吾乞かみをそあがこいたもすべなみ (十三・三二八六)

天地の神祇平會吾祈かみをそあがのむいたもすべなみ (十三・三二八四)

天地の神祇二衣吾祈かみにそあがのむいたもすべなみ (十三・三二八八)

からすれば、アレと訓んだ方が良く考へられ、したがつて、三七

九・三八〇でもアレハコヒナムと施訓すべきであらう。

帯をすら三重結ぶべく吾身はなりぬ (四・七四二)

わくらばに成れる吾身は (九・一七八五)

朝露に吾身はなりぬ (十一・三三九四、二六一九、二六六四、

十二・三〇八五)

朝露の消安き吾身老いぬとも (十一・二六八九)

朝露の吾身一つは君がまにまに (十一・二六九一)

玉梓の使も来ねば思ひやむ吾身一つぞ (十六・三八一一)

置く露の消ぬべき吾身惜しけくもなし (十二・三〇四二)

老はてぬ吾身一つに七重花咲く (十六・三八八五)

露霜の消やすき我身老ぬとも (十二・三〇四三)

朝露のけやすき我身人国に (五・八八五)

老にてある我身の上に病をと (五・八九七)

我身は千たび死にかへらまし (十一・二三九〇)

有なみ得ずぞ言われにし我身 (十三・三三〇〇)

常の帯を三重結ぶべく我身はなりぬ (十三・三二七三)

の傍線部もワガ・アガと両訓が見られるのみか、注釈書によつては

アガと訓んだりワガと訓んだりして訓詁の態度が一貫してゐない。

安我未あがみこそ関山越えてここにあらめ (三七五七)

たづきもなきは安我未あがみなりけり (四〇七八)

おいづく安我未あがみけだしあへむかも (四二二〇)

をし鳥のをしき安我未あがみは君がまにまに (四五〇五)

都見ばいやしき阿何あがみ微あがみまたをちぬべし (八四八)

の如き仮名替の事例に照合すると、ワガミの事例が存在しないのと

相俟つて、塙書房万葉集の如く、すべてアガミと訓むべきであらう。

吾わる旅は旅と思めほど家いひにして子めちやすらむ和加美わがみかなしも

(四三四三)

はワガミの例外的事例と見なされるかもしれないが、右の歌は防人歌であつて、意味も「我身」ではなく「我妻」の訛つたものである。されば、我身・吾身をアガミと訓む反証の根拠にすることはできない。我妻はワガセ・ワギモ・ワギへなどと同じ語構成をなしたものである。

- (1) この吾心しづめかねつも(二・一九〇)
  - (2) 恋草を力車に七車積て恋らく吾心から(四・六九四)
  - (3) 我心どもし思ふ(十二・二八四二)
  - (4) 我心つくしの山のみち葉の(十三・三三三三)
  - (5) やく人は焼きたらねかも吾情やく(七・一三三六)
  - (6) 吾情ゆたにたゆたに(七・一三五二)
  - (7) 春日山もみちにけらし吾情いたし(八・一五一三)
  - (8) 恋乱れ分くことかたし吾情かも(十・二二七一)
  - (9) 薄みかも恋のよどめる吾情かも(十一・二七二一)
  - (10) はしきやし君に恋らく吾情から(十二・三〇二五)
  - (11) 吾情きやすみの池の(十三・三二八九)
  - (12) 我情やくも我なりはしきやし君に恋ふるも我之心から(十三・三二七一)
  - (13) 針目おちずこもりにけらし我情さへ(四・五一四)
  - (14) はねず色のうつろひやすき吾意かも(四・六五七)
  - (15) 吾意天つ空なり土はふめども(十二・二八八七)
  - (16) 木の葉をし己心からなつかしみ思ふ(七・一三〇五)
  - (17) 高麗剣己之鬘迹から外のみに見つ々(十二・二九八三)
- の傍線部もワガココロ・アガココロと同様に訓まれてゐる。我・吾

の訓をかなり細かく考慮して施訓してゐる埴書房万葉集においてさへも、(1)(2)(10)(11)(12)はワガココロ、残りはアガココロと訓みわけられてゐる。吾心がカラに接してゐる場合はワガココロ、他はアガココロと訓まれ、特に(1)においては「我情」「我之心」と一首中で訓みわけられてゐるのは、相応の理由があつてのことと推察される。しかし、その理由はわからない。もしかしたら、「ま木立つ不破山越えて狛剣和射身我原乃行宮に(二・一九九)」の例からコマツルキがワにかかる枕詞として、(1)のコマツルキが己之鬘迹からにかかる点を同一と見なしてワガココロカラと訓み、(1)(2)(10)(11)の場合も(1)から類推してワガココロと施訓されたのではないかと忖度される。集中の仮名書の例からすれば、

安我己許呂二ゆくなもと(十四・三五二六)

行くへを知らに安我己許呂明石の浦に(十五・三六二七)

の如く、アガココロと訓んでもよささうである。特に、枕詞「高麗剣」はワにかかるか、身・心にかかるかも明確でなく、(1)において意味上「我情」「我之心」と訓みわけねばならぬ必然性は見当らず、我心がカラに接する場合もアガと訓めるのではあるまいか。ただ、「和何許々呂(神代記)」の例からすると、ワガココロとも言つていたこと明白であり、あるいは、集中の前掲歌(1)の(1)の中にもワガココロと訓むべき例が存在するかもしれない。ともあれ、記・紀に見える同一歌において、書紀で「阿餓許居呂(卷十)」とあるのが、古事記では「和賀許々呂(応神)」とあり、アガココロ・ワガココロが二重形として尙在してゐた時期があつたことは確實である。しかし、アガ・ワガの面からは書紀の例が古形を保つてゐる



るのではないかと思はれる。

(イ) 玉くしげ奥に思ふと見たまへ吾君(三・三七六)

(ロ) 朝にけに常に見れどもめづらし吾君(三・三七七)

(ハ) 吾君はわけをば死ねと思へかも(四・五五二)

(ニ) いで吾君人の中ごと聞きこすなゆめ(四・六六〇)

(ホ) いはほなす常磐にいませ貴き吾君(六・九八八)

(ヘ) 吾君にわけは恋ふらし(八・一四六二)

の吾君にしてもワガキミ・アガキミの両訓がある。注釈書によつてはワガキミと訓んだりアガキミと訓んだりして統一がない。ただ一例ではあるが、

松が枝の栄えいまさね尊き安我吉美(十九・四一九六)

からすれば、ワガキミの例がないのと相俟って、アガキミと訓んで差支へあるまい。少くとも(ホ)はアガキミでほぼ当を得てゐると思ふ。

吾衣人にな着せそ(四・五七七)

吾衣君に着せよと(十・一九六一)

吾衣するにあらず(十・二一〇一)

我衣色とり染めむ(七・一〇九四)

もワガコロモ・アガコロモの両訓があるが、

安我許呂母下にも着ませ(十五・三五八四)

によつて、アガコロモと訓むことができ、

こほろぎの吾床隔に鳴きつつもとな(十・二二二〇)

も、「安我登許能飯爾(十七・三九二七)」からして、アガトコノへと訓むのが良いであらう。

ここだ吾胸いぶせくあるらむ(四・六一一)

たびまねくなれば吾胸きりやく如し(四・七五五)  
いぶせき吾胸誰を見ばやまむ(十・二二六三)

我胸はわれて擗けて利心もなし(十二・二八九四)

の傍線部にもアガムネ・ワガムネの両訓があるが、

たまふれど安我牟爾いたし(十五・三七六七)

に照合すれば、ワガムネの例がないのと相俟って、アガムネと訓むのが良からう。同様に、

④ いで吾駒早く行きこそ(十二・三一五四)

⑤ 為吾に妹もことなく妹が為我もことなく(四・五三四)

うらまけて吾為たばやや大にたて(七・一二七八)

為我と織女星たなばたつめのその屋戸に織る白妙は(十・二〇二七)

⑥ 思へりし吾児のとじを(四・七二三)

因をなみ思ひてありし吾児はもあはれ(四・七六一)

祝ひつつあがもふ吾子ま幸くありこそ(九・一七九〇)

霜ふらば吾子はぐくめ天の鶴むら(九・一七九一)

朝戸出のかなしき吾子(二十・四四〇八)

も、アガ・ワガの両訓があるが、

⑦ 安我古麻(十四・三四四一)・安加己末(催馬楽・我が駒)

⑧ 安我多米(五・八九二)

⑨ 安我古(五・九〇四)・安我故(十九・四二二〇)

の傍証例からして、それぞれアガコマ・アガタメ・アガコと訓むのが穩当と思はれる。

わけが為吾手もすまに春の野に抜ける茅花ぞめして肥ませ(八・一四六〇)

は仮名書例が東国語に限られ、しかも、

稲つけばかがる安我手を(十四・三四五九)

紐たえば安我互とつけろこれの針はるもし(二十・四四二〇武蔵)

和我互ふれなな地に落ちもかも(二十・四四一八武蔵)

の如く、ワガテ・アガテの両例が存在し、いづれの訓にすべきか決定できない。特に、同じ武蔵国においてワガテ・アガテの両訓が見られることは東国においてワガテ・アガテが二重形として行なはれてゐたと見なされる。しかし、「倭我提(紀・十七)」「倭我底(紀・二十四2例)」「和賀互(仁徳記)」「和加天(神楽・大宮)」「和加天(神楽・酒殿歌)」を参照すると、中央語においては記紀時代にすでにワガテであったと見られ、万葉卷八の事例はワガテと訓むべきかと思われる。アガテは古語が東国語に化石的に残存して、ワガテと二重形をなしてゐるのかも知れない。あるいは、東国ではアガテがワガテよりも多用されてゐたため、アガテの類推においてアガテがワガテとともに用ゐられたのかも知れない。ともあれ、中央語の確例は記・紀のワガテに限られてゐるから、それによつて一応ワガテと訓んでおくことにする。

### 三

前項の終りに述べた「吾手」のやうに、諸注にアガテと訓まれてゐるもののワガテと施訓するのが當を得てゐると見なされる事例をはじめとして、集中には他にもワガ・ワレと訓むのが妥當な例が存在する。前記したワギモ・ワガセの事例を想起していただければ容易に理解できるであらう。

吾園の李の花か(十九・四一四〇)

いざ吾苑に鶯の本依ひ散らす梅の花見に(十九・四二七七)

の傍線部は「和何則能(五・八二二二)」から、ワガソノと訓むことができ、

吾盛またをちめやも(三・三三三二)

も「和我佐可理(五・八四七)」からワガサカリと訓んで差支へなからう。つまり、残存する文献の事例によつて施訓する以外に最良の方法がない以上、確例の有無、特に、一方の確例を欠いてゐる場合、可能性の問題として決定してゆくわけである。

我袖(三・二六九、十・二二三五、二三二二)

吾袖(七・一〇八五、十・一九九五、二二三〇、十二・二八五七)

も「和我袖(十五・三七一一)」から、ワガソデと施訓して良からう。ただ、

吾衣手(一・五、四・七〇三、十・二〇九二、十一・二六二五)

十二・三〇四四或本歌尾向、三一六三)

我衣手(四・七〇八、九・一六七五、十・一九九四)

我衣袖(十二・二九五四、十三・三二五八、三二七四、三二八一)

### 二

吾袖(七・一三七一、十一・二六八六、二六八八、二六九〇、

十三・三二八〇)

のやうに、「和我許呂母互(十五・三七二二)」「阿我許呂毛互(十五・三七七八)」とワガコロモデ・アガコロモデの両形が存在する場合には、いづれとも定め難いこともある。しかるに、従来はワガソデから類推してかワガコロモデと訓まれてゐたが、他の類似した語形入例へばアガコロモデから類推して、一応アガコロモデと訓むことにする。

吾舟(三・二七四、七・一二〇〇、一二二二、一二九九、九・一七一九、一七三三、十・二〇五八、二〇五九)

我舟(十七・三八九二)

も「和我布禰(十五・三六二九、二十・四四一三)」によって従来通りワガフネと訓む。

吾門(十・一八一九、二二八六、二一九〇、十六・三八七二、三八七三)

我門(十・二二二一、十二・三一二五、十九・四一七六)

は「和我可度(二十・四四一八)」「和我加度(二十・四四六三)」「和可と止(神樂歌・杓)」「和加と止(神樂歌・杓・片折、風俗歌・我門)」によりワガカドと訓み、

吾命(三・二八八、三三三、四・五九五、十・一九八五、十一・二四三三、二五九二、十二・二八九一、三二五〇、十六・三八一三)

我命(十二・二九四三)

吾齡(十二・二九五二)

は「和我伊能知(十五・三六二二)」「倭我伊能知(紀・十四)」によってワガイノチと訓んで誤りなからう。

吾里(二・一〇三)

吾郷(十・二二七九)

我里(十二・五一五三)

も「和我佐刀(十七・三九八四)」によってワガサトと施訓でき、吾許(十一・二七七三)

四・三五四九)によってワガリと訓んで差支へあるまい。

吾之故(九・一八〇九、十六・三八一一)

我故(十一・二四五五、十二・三二一六)

言故(十一・二五三五)

は「和我由恵(十五・三六一五、三七四五、三五八六)」「和礼由恵(十五・三七二七)」の両形があり、ワガユエ・ワレユエいづれとも決定し難い。ワレ・アレは助詞を伴って体言を修飾することはなく、また直接に体言を修飾することもない。したがって、ワレユエは唯一の例外である。「ワ家(催馬楽)」「ワ来(十四・三三八二)」などのワの用法が古形の遺影であることから推察すればあるいは古形が化石的に残存したものと考へられるが、確証は得られない。されば、かかる特例を用例とするには一沫の懸念があり、「吾之故」における之字の表記を考へるに、集中アレといふ場合に「吾之」と表記することはなく、少なくとも「吾之故」はワガユエを表記したものと考へられる。「我故」「言故」はワレユエの可能性がなくもないが、ワレユエが特例であることと相俟って仮名書例と「吾之故」から類推してワガユエと施訓するのが無難のやうである。

吾行は久にはあらじ(三・三三五)

吾去は七日は過ぎじ(九・一七四八)

も「和我由伎(二十・四四二一)」によりワガユキと訓み、

吾去道(八・一五四六)

は「和我由久美知(十四・三四四三)」「和賀由久美知(応神記)」によりワガユクミチ、

は「和我多知弥礼婆(十七・四〇〇六)」「和賀多知美礼婆(履中記)」によってワガタチミレバと訓むことができ、

さして吾行この浜に(十九・四二〇六)

吾行河(一・七九)

吾行如(十三・三二七八)

今ぞ吾行(七・一一二一)

も傍訓の通りで誤ってゐないと思はれる。

吾裳(七・一二八〇)

は「和我母(十五・三六五六)」を加味してワガモと訓むことができよう。

ところで、次の例は如何であらうか。

我大王(一・三、二・一五九、六・一〇〇五)

吾大王(一・五、三六、四五、五〇、七七、二・一六二、一九九、三・二三九、二六一、四二〇、六・九三八、九五六

一〇四七、一〇五〇、一〇六二、一八・四〇九四)

吾王(二・一六七、一九六、一九八、二〇四、三二九、四七五、四七六、四八八、四七八)

我王(二・二〇二、三・二九五、十三・三三三四)

吾皇(六・一〇五〇、一〇五三、十九・四二五四)

吾天皇(十九・四二五四、四二六六、四二七二)

吾於富書美(二、三三九)

国歌大観番号に傍線を施したものは、ヤスミシシといふ枕詞とともに用いられた例である。集中の仮名書を用例は、

和期於保伎美(十八・四〇九九)

和期大王(一・五二、六・九一七、九三三、九三六、九三三)

吾期大王(二・一五二、一五五)

和期天皇(十三・三三三四、十八・四〇六三)

和其大王(二十・四三六〇)

の如く、ほとんどワゴオホキミであることを思へば、前掲の事例はワゴオホキミと訓んでもよささうである。勿論、ワゴオホキミはワゴオホキミの遡行同化によるものであり、ワゴオホキミとも訓めるからして、諸注釈書によって訓がわかれるのも故なしとしない。注釈書によっては、ワゴオホキミ・ワゴオホキミ両訓を認めてゐるものもあるが、集中の用例からすると、ワゴオホキミと施訓するのが穩当のやうである。原初的語形はワゴオホキミであるから、時代的にはワゴオホキミが古いと見なされる。事実、記・紀の用例は「和賀淤富岐美(雄略記二例)」「和賀意富岐美(雄略記・仁徳記・景行記)」「和我於朋枳美(紀・十七)」「和餓於朋着瀾(紀・二十二)」「和餓於朋枳瀾(紀・十一)」「倭我餓衰枳瀾(紀・十四)」の如く、すべてワゴオホキミである。集中にも「和我於保伎美(十八・四〇五九、二十・四五〇八)」の用例があり、必ずしもワゴオホキミと訓まねばならないといふことはない。用例から言及する限り、記・紀の時代においてはワゴオホキミ、万葉集時代ではワゴオホキミが普通で、古代の名残としてワゴオホキミも二重形として残存してゐるものと推察される。したがって、どの例をワゴオホキミ・ワゴオホキミと訓みわけけるかは非常に困難であり、どちらか一方に統一するのも一つの方法ではあらうが、時代が下れば「和己於保伎美(統紀・新訂増補国史大系一七二頁)」「和期意富岐美(熱田神宮縁起)」の如く、ワゴオホキミであり、万葉集が過渡期にあつてゐるやうで、ワガ・ワゴいづれとも決定できない。ただし、集中

のワガオホキミ・ワガオホキミの假名書例からすれば、単独の場合  
はワゴ・ワガの二重形があるが、ヤスミシシの枕詞とともに用ゐら  
れた事例に限つて、すべてワゴオホキミであり、万葉時代には「や  
すみししワゴオホキミ」はすでに慣用的表現語句となつてゐたので  
はないかと見なされ、枕詞ヤスミシシとともに用ゐられた事例だけ  
はワゴオホキミと訓むのが良くはないかと思ふ。

如吾(六・九六一、十・二一三七)

如我(十一・二三七五)

は諸注アガゴトクとワガゴトクに分かれてゐる。假名書の例は一例  
ではあるが、「安我其等久(十五・三七五〇)」を参照するとアガ  
ゴトクと施訓して良からう。かりに、ワガゴトクと施訓するにして  
も、塙書房万葉集のやうに、九六一・二三七五をアガゴトク、二一  
三七をワガゴトクと訓みわけねばならぬ理由・根拠は理解できな  
い。したがつて、

如吾歟(四・四九七)

如吾等架(七・一一一八)

もアガゴトカ・ワガゴトカの両訓があるが、前記アガゴトクの例か  
ら類推してアガゴトカと訓んでよささうである。ただ、アガゴトク  
・ワガゴトクの場合と同様、前者をアガゴトカ・後者をワガゴトカ  
と訓みわけた塙書房万葉集の施訓は如何であらうか。

1

例からすると、アレ・ワレ、アガ・ワガ、ア・ワなどには用法に  
差異があり、本項ではそこに考察の端緒を求めたわけである。例  
へば、ワ・アが単独で用ゐられるのは「ワ家(催馬楽・風俗歌)」「  
ワ許(万十四・三五三六)」「ワ来(万十四・三三八二)」「  
をはじめとして、ア兄・ア子・ア妻の如き古形ともいふべき特異な  
事例に限られ、その用例も極めて稀であり、その存在にも偏りがあ  
る。これに対しア・ワは助詞を伴つて用ゐられるのが普通であり、  
用例も助詞ガを伴つて「アガ身」「ワガ苑」などと用ゐられる場合  
が最も多く、アレ・ワレは格助詞ガを伴つて「アレガ」「ワレガ」  
となることはない。そして、直接に助詞を伴つても体言を修飾する  
ことはない。ワ・アはガ助詞を最も多く伴ない、ヨが次いで多い。  
ハは稀に伴ふことがあるが、アに助詞ニが承接することは全くな  
い。ワに助詞ニがつくことは少ないが、アに助詞ニが承接することは全くな  
い。後もあはむ吾莫恋妹は言へど恋ふる間に年は経につつ(十二・  
二八四七、人麻呂集)

傍線部はワニナコヒソト・アニナコヒソトの両訓があるが、ワニ  
は恋ふと吾との関係において既述した如く当を欠き、アニは恋ふと  
の関係上は難点はないが、助詞ニが直接アに承接することはなく、  
両訓とも穩当ではない。ここは人麻呂集歌であることや格調を考慮  
して、アレニナコヒトと訓むべきところであらう。

ここで、見落してならないことは助詞ハがア・ワに承接する場合  
である。ワにつく場合は

宿毛等和波毛布(十四・三四九四)

和波素登毛波自(十四・三四五一)

和波麻可自夜毛(十四・三四六四)

和波己許爾思天(十四・三五三八)

和波可敏里許牟(二十・四三六八)

久江豆和波由久(二十・四三七二)

和波等可自等余(二十・四四〇五)

の如く、ほとんど東歌・防人歌に限られ、ア・ワに承接する場合は

己良例安波由久(十四・三五一九)

阿波母与(神代記)

和波己芸壺奴等(二十・四四〇八)

の如く、古事記や東歌及び古語癖の強いと言はれる家持の歌に見られ、アハ・ワハはともに古語が残存してゐるものと見なされる。されば、東歌の

吾者余利爾思乎(十四・三三七七)

吾乎禰之奈久奈(十四・三三六二)

において、傍訓の如く訓むのは自然であり、誤つてもゐないだらう。万葉第一期の

吾者毛也やすみ兒得たり(二・九五 藤原鎌足)

を、前掲神代記の歌を用例としてアハモヤと訓むのは首肯できるがこれを集中の他の例にまで安易に適用することは如何であらうか。といふのは「吾者毛也」でさへアレハモヤと訓む可能性が強いからである。

応消毛吾者おもほゆるかも(八・一五六四)

可消吾者おもほゆるかも(十・二二四六)

忘忌久毛吾者なげゆるかも(十二・二八九三)

豎文吾者忘らえぬかも(十三・三二五六)

の傍線部は従来ワハ・アハと訓まれてゐるが、前記の事実と矛盾してをり、ケヌベクモアレハ・ユシクモアレハ・シマシクモアレハと訓むべきところである。

消乍毛我者窓ひわたるかも(十・一九〇八)

の傍線部もケツツモワレハ・ケツツモアレハと訓まれてゐるが、消乍毛は「今にも消えてしまひさうに」といふ意であり、集中の用例もケヌベク、または

天の露霜取者消乍(七・一一一六)

君に見せむと取者消管(十・一八三三、十一・二六八六)

降らなむ雪は空爾消二管(十・二三一七)

とケニツツであり、ケニツツモと訓むのが当を得てゐる。前掲した一五六四・二二四六・二八九三・三二五六番の歌と構文法を同じくしてをり、我者はアレハと訓むべきこと前述したところであつて、ケニツツモアレハと訓むべきであらう。

かくのみこそ吾恋度七目(十三・三二九八)

の傍線部にも、アガ・ワガの両訓があるが、一首の意や助動詞ナムがワガ・アガとは呼応しないこと、即ち、ナムは上にガ助詞をとらないことを看案すれば△アハ・ワハは用例・格調上から不適切であるが、卷十三の古歌であることを考慮するとアハも可能である▽アレと訓むのが良いであらう。

千歳如吾恋哉(十一・二三八二)

はア(ワ)ハコフルカモ・ワガコフルカモなどと訓まれてゐるが、  
既述してきたやうにアハ・ワハは当を欠き、例へば

あれはおもへばわびしくもあるか  
吾者念者惑毛安流香(四・七一七)

しりつともあれはこよるか  
知管毛吾者恋香(七・一三三二)

なまなをもあれはおへるか  
無名乎吾者負香(十一・二七二六)

あひみそめてもあれはこよるか  
相見始而毛吾者恋香(十二・二八九九)

ここにたかくあれはこひつともあるか  
幾許吾者恋作裳荒鹿(四・六六六)

の如く、構文法を同じくしてゐる事例も「アレハ―モ―カ」「―モ  
アレハ―カ」とあり、人麻呂集においては哉をカ・カモ・ヤ・ヤモ  
の表記にあてられ、カと訓んでも差支へなく、加へて「恋ふ」との  
関連においてアレ・アガとあるべきことを考慮すると、アレハコフ  
ルカと施訓すべきと思はれる。

吾狐悲念乎(二・一〇二)

の吾は多くアハ・ワハと訓まれ、あるいはワガとも訓まれてゐる。  
一首の意や恋との関係からはワガではふさはしくない。アハ・ワハ  
と訓めば七音の定数音で難点がないやうに思はれるかもしれない  
が、恋との関係からワガと同様ワハも不穩当であり、更に、アハ・  
ワハの語形が中央語ではすべからく当を欠いてをり、むしろアレハ  
と訓むのが良い。アレハと読めば、句中に単独母音を含まぬ字余りの  
例外となる点に難があるからして、アレコヒモフヲなどと訓んでは  
如何であらうか。しかし、この歌が二期の歌であることを思へば、  
アハコヒモフヲの訓が全く可能性がないといふこともない。

吾恋南雄(十一・二七六七)

の吾も格調上七音の定数音になるやうにアハと訓まれてゐるが、

あれはこひなむ  
「吾者恋南(十一・二五四八)」を考慮すればアレハと訓むべきか  
と思はれる。しかし、字余りの難点を解消しようとするれば「吾將  
恋香聞(七・一一八一)」あれかくこよと「吾如此恋常(八・一四九八)」を加味  
してアレコヒナムヲと施訓すべきであらう。

恋吾者(十一・二五五三)

はアハ・ワハと訓まれてゐるが、コフルアレハと訓むのが穩当であ  
り、同様にアハと訓まれてゐる次例

吾者隠不得(十一・二七五二)

もアレハと改訓するのが良い。

心ゆも吾者不念寸(四・六〇一、六〇九)

も、アハ・ワハと訓まれてゐるが、アレハと訓むべきである。「現  
にも夢にも吾者不思寸(十一・二六〇一)」は傍証になるであら  
う。

今者吾羽わびぞしにける(四・六四四)

今者吾波死なむよわがせ(四・六八四)

今者吾者死なむよ我妹(十二・二八六九)

今者吾者死なむよ我背(十二・二九三六)

の傍線部もアハと訓まれてゐるが、アレハと改訓すべきである。そ  
して、アハ・ワハと訓まれてゐる次例も

吾者恋益(四・六九八)

吾者未見(四・七四六)

前者は恋との関係においてアレハコヒマス、後者はワ(ア)レハイ  
マダミスと訓むべきであらう。

吾者將去(八・一五四九)

は本文を「吾者持將去」としてワレハモチイナムと訓まれてゐた。しかし、塙書房万葉集は本文を前掲の如く定めワハモチテユクと施訓した。「將去」としたのは卓見であるが、「吾者」は格調を考慮してのことであらうが、首肯できない。もしワハと訓むべきとすれば

吾者將而往 (十三・三三二二三)

もワハと訓むべきであらう。ワハは既述の点に矛盾し、右の例も傍訓の通りで誤つてはゐない。逆にこの例を傍証として、前例も「吾者將去」と訓んでしかるべきであらう。

吾八思益 (十三・三三〇六)

をワハオモヒマス・ワハオモヒマサルなどと訓んでゐるのは改訓すべきであらう。塙書房万葉集のアレヤオモヒマスが秀れてゐると思ふ。

吾者年可太奴 (十・二〇一二)

の傍線部は本文に疑点があり定訓を見ないが、吾者をワレハと訓むことは明らかであり、ワハ・アハと施訓すべきではあるまい。

吾二行 (十三・三三一七)

の吾もワハと訓まれてゐるが、ワレハと施訓するのが妥当してゐる。しかし、格調や卷十三の古歌であることを考慮するとアハと訓んでも良いかと思ふ。

金待吾者 (十・二〇〇五)

組解吾者 (十一・二七〇三)

言上為吾 (十三・三二五三)

相念吾者 (十九・四二二五)

の傍線部にしても、ワレハ・アレハの両訓があつて定説を見ない。注釈書によってはワレハと訓んだり、アレハと訓んだりして訓詁の態度が一貫してゐないものもある。構文を同じくした確例は

伊埜多都和例波 (二十・四三七三)

佐之且伊久和例波 (二十・四三七四)

船出須和礼者 (十五・三五九九)

美知由久和礼播 (十七・四〇〇六)

の如くワレハであり、当然、アキマツワレハ・ヒモトクワレハ・コトアゲスワレハ・アヒオモフワレハと訓むべきであらう。そして、

① 伊保里為吾等者 (三・二五〇)

② 久しき時ゆ念来吾等者 (十一・二四一五)

③ いづれの野辺に鷹將為吾等 (六・一〇一七)

もそれぞれワレハ・ワレと訓んで良い。①は別に同歌の「伊保里須和礼波 (十五・三六〇六)」があり、ワレハと訓むこと確実視できる。②も異伝歌とおぼしき「久しき時ゆ億寸吾者 (四・五〇一)」からして、ワレハと訓んで差支へあるまい。そして③も酷似してゐる「いづれの島に伊保里世武和礼 (十五・三五九三)」から、ワレと訓むべきこと明らかであらう。更に、

辛恋毛吾為鴨 (十一・二七四二)

の傍線部をアレハと訓むべきこと

可良伎孤悲乎母安礼波須流香母 (十五・三六五二)

可良吉恋乎母安礼波須流香物 (十七・三九三二)

の用例によって明白である。ワハ・アハが当を欠いてゐるのは勿論、吾と恋との関係においてワレハとは訓み難いのである。さうし



て、

如是有恋吾為鴨 (十一・二四一一)

如是有恋乎毛吾者遇流香聞 (四・五五九)

可消恋毛吾者為鴨 (十・二二九一、十二・三〇三九)

立不得恋吾為鴨 (十一・二七一四)

照して、ヲ・モを補読すべきであらう。

見尚幾許恋吾者 (十一・二五五三)

もワハ・アハと訓まれてゐるが、アレハと施訓すべきこと言ふまでもない。そして、

将恋吾鴨 (十一・二三三九)

恋来吾乎 (十一・二八〇八)

吾不恋 (十二・二八六三)

も格調や恋との関係において傍訓の如くで間違つてはゐないと思ふ。

五

以上、集中の吾・我の事例について考察し、その訓を決定して来たが、アガ・ワガ・アレ・ワレ・ア・ワイづれに訓むか明確でなく、従来の訓でも誤りと断定できない事例は勿論、五割の可能性があるものは割愛して、今後の研究を俟つことにした。例へば次の如き事例である。

吾乎待跡 (二・一〇八)

吾乎待待會 (三・三三七)

吾乎待登 (十一・二六〇七)

吾乎待不得而 (十二・三一四七)

はアヲ・ワヲいづれにも訓むことができ、断定できない。かといつて、アヲと訓んだりワヲと訓んだりするのは、訓みわけ理由根拠があるのならばいさしらず、如何かと思ふ。一応、アヲ・ワヲどちらかに統一して、後考を俟つべきであらう。それから、思・念とともに使用された事例は冒頭にあげた拙稿において述べたので、ここでは省略した。また、係助詞ゾをうけた吾・我はかつて拙稿(熊本女子大学研究紀要十六卷一号所載)において言及したやうに「ゾアが十動詞」といふ構文をなし、必ずアガと施訓すべきところである。擱筆するにあたって一言附言すれば、

(イ) 名積序吾来恋ひてすべなみ (十三・三二五七)

(ロ) 求會吾来恋ひてすべなみ (十三・三三二〇)

(ハ) 花をよみ鳴くほととぎす見會吾来之 (八・一四八三)

は如何に施訓すべきであらうか。吾をアガと訓むことは動かないとしても、来・来之は従来コシと訓まれてゐる。しかし、前記三例のやうに理由を表はす「多み」「しげみ」「まねみ」「すべなみ」…等のミ語尾と呼応した構文法や発想法を同じくした事例で、コシ・セシなどとなつてゐる用例が無いのと相俟つて、すべてクル・スル・ケル・ミルなど現在形または現在完了した動作の感動を表示してゐる語形に限られてゐる点、疑念がないわけではない。ここは用例に照合して、(イ)は異伝歌の關係にあり、意味上動作が完了した

ものと見なすならば(げ)はナヅミゾアガケル、(け)はモトメゾアガケルと訓むべきであらう。(ウ)は来<sub>レ</sub>之と表記されてゐるから、ミニゾアガコシは動かない訓と思はれ、唯一の例外と見なされるかもしれない。が、これとて、ミニゾアガケルと訓むことができ、必ずしも例外とすべきではない。むしろ、ミニゾアガケルと施訓して例外から除外すべきであらう。ただ、之字の処置に疑問をもたれるかもしれないが、之字は漢文における語末助字の用法で、強調・詠嘆を表はす不読の助字であり、疑念は解消すると思ふ。(福田良輔博士「日本書記の之字について」語文ノート収所参照)。因みに、係助詞カをうけてゐる

如何<sub>いかに</sub>吾<sub>わが</sub>將<sub>まさ</sub>為<sub>な</sub>行<sub>ゆ</sub>くへしらずて(十三・三二四〇)  
も、アガセムと施訓して誤つてゐないだらう。

家<sub>いかに</sub>に行きて伊<sub>いかに</sub>可<sub>か</sub>爾<sub>が</sub>可<sub>か</sub>阿<sub>あ</sub>我<sub>が</sub>世<sub>せ</sub>武<sub>ぶ</sub>(五・七九五)  
は勿論、

いづち向きて可<sub>か</sub>安<sub>あ</sub>我<sub>が</sub>和<sub>わ</sub>可<sub>か</sub>留<sub>りゅう</sub>良<sub>りやう</sub>武<sub>ぶ</sub>(五・八八七)  
あとかあがせむ

安<sub>あ</sub>杼<sub>しゆ</sub>加<sub>か</sub>阿<sub>あ</sub>我<sub>が</sub>世<sub>せ</sub>牟<sub>む</sub>(十四・三四〇四)

おきて夜<sub>や</sub>ながく阿<sub>あ</sub>我<sub>が</sub>和<sub>わ</sub>加<sub>か</sub>礼<sub>れい</sub>南<sub>なん</sub>(五・八九一)

も傍証の役をはたしてゐよう。最後に、

妹<sub>い</sub>に恋<sub>こ</sub>ひ吾<sub>わが</sub>哭<sub>なく</sub>涕<sub>なみだ</sub>(十一・二五四九)

君<sub>きみ</sub>に恋<sub>こ</sub>ひ吾<sub>わが</sub>哭<sub>なく</sub>涕<sub>なみだ</sub>(十二・二九五三)

の吾<sub>わが</sub>はワガ・アガと注釈書によって訓がわかれてゐるが、「和何那久那美多(五・七九八)」からしてワガナクナミタと訓むのが良くはないかと思はれる。

記述の外にも可能性の点ではとまらぬかに沙<sub>さ</sub>々<sub>さ</sub>とオ<sub>お</sub>を<sub>を</sub>修<sub>しゆ</sub>す<sub>す</sub>と<sub>と</sub>い<sub>い</sub>しれない。或いは、それを看過してゐるのではないかと恐れるが、御叱正・御垂教をお願いして他日を期すことにする。

(四二・一二・三一稿、四三・九・二〇補稿)